

2024.12.1

現代俳句千葉

155号

巻頭エッセイ

俳句の迷路で

幹事 松本千花



「もやちんノート」というノートが話題になっていくという記事を以前読んだことがある。イライラしていることや心のモヤモヤを書き込み、水を注ぎレンジで「チン」すると溶ける。イライラ、モヤモヤを成仏させるためのノートだ。そうか、私が俳句を好きになったのはモヤモヤを発散できるからか。しかも

私は「もやちん俳句」を溶かしたりせず、大切にしまっておける。
最近「ローリングストック鬼灯が足りない」「枇杷の実のずかずか落ちる境界線」「多数決が寝そべっている木下闇」「寄り添うこと月の舟から落ちぬこと」などの拙句が所属結社で良い評価をいただいた。日常感覚を韻律に乗せて軽やかに表現、季語への感応がユニークで新鮮と誉めていただいた。その反面、取り合わせ形式を濫用すると俳句が脳内でのイメージの機械的な接続に堕しかねない、というご指摘も

あり、考えさせられている。

折しも、第七十回角川俳句賞受賞作品、若杉朋哉氏の「熊ン蜂」を読んだ。五十句のほとんどが一物仕立てで作られている。「立ち始めなる門松のよそよそし」「熊ン蜂ぶーんと尻の行ったきり」「毛虫の毛風に押されて前向きに」「雛菓子のごぼるる粉に色ありぬ」「涙をかみながら怒ってゐる子かな」などに惹きつけられた。選者の仁平勝先生は、「二物衝撃ばかりが流行る現俳壇で貴重な一物仕立ての一連が出て来た。俳句の芸というのは、やはり一物仕立てを作ってみたほうが伸びる。一物仕立てのほうが奥が深い。」と講評なさっている。

私は常々、先生方の顔色は気にせず、好きなように書きたい、と思っている。それで誰かが共感したり笑ってくれたら、なお嬉しい。駄目だと言われたら、また他の作戦を考えようと思う。しかし、好きなように書くことは、当然ひとりよがりにつながり、一物仕立てに挑戦するなど、自分流から離れてみることも学ばなければ、と思うこの頃である。

目次

俳句の迷路で 松本千花	1
秋の吟行会	2～3
諸家近詠	4～5
会員・会友の近況	4～5
新会員・会友紹介	5
私の感銘句	6～8
強化部だより	9
津田沼研究句会報告	10
青葉研究句会報告	10
柏研究句会報告	10
君津研究句会報告	10
いすみ安房研究句会報告	10
ひろば	11
図書紹介・掲示板	12

千葉県現代俳句協会会報

秋の吟行会

上総国分寺跡・上総国分尼寺跡

会場 市原市市民会館

令和六年十月二十七日(日)

前日までの天気予報は曇り、雨が降らなければいいと思っていたが、当日になってみれば朝から太陽の出る良い天気。これでは雨より暑さの心配をした方が良いのかとまどいながら家を出た。

市原の国分寺、国分尼寺跡は個人的に一度訪れてみたい場所であった。五井駅からバスで市原市役所前まで。まず国分尼寺跡へということになり皆で歩き始めた。並木会長は緑の作業衣で登場。「こつちだよ」と案内して下さった。十分ほど歩いたが太陽が照ると十月とは思えない暑さ。

展示館、そして復元された回廊へと逃げ込むようになった。回廊に入ると外とは打って変わって涼しい風、古代の人の知恵であろうか。回廊のそばには大きなタブノキもあり皆木陰で「一休みしましょう」と声をかけあった。回廊と風を題材とした句が多かったのも皆この涼風に感動したためである。

その後市役所側に戻って国分寺跡を目指す。こちらは江戸時代に建てられた薬師堂や仁王

門があり、ちょうど境内では骨董市が開かれていた。お香が焚かれるなかで置物や古銭、食器から昔懐かしい昭和のおもちゃまでいろいろなもの売られていた。ゆっくり見たかったがそろそろ俳句もまとめなければならず、皆後ろ髪引かれる思いで後にした。骨董市を題材にした俳句もいくつかあった。

時間まで会場に入れないということで市民会館の前で思い思いに昼食をとった。この時間には雲が広がって午前中のような暑さではなかった。しかし十二時半過ぎにぼつぼつと雨が落ちはじめ、少し早めに会場に入った。

その後は投句、選句と首尾よく進んだ。総勢二十四人、欠席投句なしでこじんまりとした句会になったが、講評では面白い句が多かったという声も出た。

予定より早めの三時半頃に句会は終了し、外に出ると一雨通った様子であったが雨はもう上がっていた。午前中の暑さから一転して午後は雨と天候に振り回された一日だったが、吟行の間に雨に降られなかったのは皆行いがよかったのだらうと思った。

司会 長井 寛

披講 高橋宗史・石井紀美子

(三宅たくみ記・写真森井美恵子)



上総国分尼寺跡



上総国分寺跡



天平13年(741)聖武(しょうむ)天皇によって発せられた「国分寺建立の詔」により、上総国分寺と国分尼寺が建立され、最近の発掘調査によると、法隆寺と同じ配置(法隆寺式伽藍配置)で、金堂・塔・講堂が建てられ、また、国分寺の屋根瓦を焼いた登窯(のぼりがま)の跡も、この近くから発見されたが、瓦にある文様は「宝相華文」と呼ばれ、中国で考へられた当時の流行文様で、唐草の文様が花のように見えます。



尼寺へ



国分寺跡の出土品

〔二十位入賞者作品〕

- ① 回廊を対角線に爽籟来 遠藤 寛子
 - ② ちくはぐな秋が来ている尼寺・僧寺 石井紀美子
 - ③ 吾亦紅男ふたりが触れている 高橋 宗史
 - ④ コスモスが私をさらう時をさらう 三宅たくみ
 - ⑤ 天平の襲来人とは泡立草 木之下みゆき
 - ⑥ 斑鳩の使者待つ安房の秋桜 長井 寛
 - ⑦ 秋桜と骨董市に迷いこむ 白木 暢子
 - ⑧ 馬追いの翅は上総のうすみどり 横須賀弘子
 - ⑨ 天平の貌のこおろぎ丹の回廊 羽村美和子
 - ⑩ 書を捨てよ草雲雀鳴く尼寺へ 並木 邑人
- 〔特別選者特選句〕
- (並木邑人会長 特選)
 - 平安の世経誦す尼に和す素風 栗原 正子
 - (高橋健文 特選)
 - 天平の貌のこおろぎ丹の回廊 羽村美和子
 - (高橋宗史 特選)
 - ちくはぐな秋が来ている尼寺・僧寺 石井紀美子
 - (長井 寛 特選)
 - 万葉人の遠きまぼろし小鳥来る 増田 豊子
 - (木之下みゆき 特選)
 - 斑鳩の使者待つ安房の秋桜 長井 寛
 - (羽村美和子 特選)
 - 天平の襲来人とは泡立草 木之下みゆき

〔その他作品〕

- 秋の轟音草刈りのしなやかさ 伊与田すみ
- 復元の回廊巡る秋あかね 高橋 博
- ドーナツをかじり天平の秋空 高橋 健文
- 天平の地よりこぼれし実紫 森井美恵子
- 八角灯籠秋蝶が来て御辞儀する 吉田 耕史
- 草は実に道は一つと言ひ張りぬ 加藤 法子
- 回廊の奥に微笑むうつ田姫 鹿兒嶋俊之
- 近親の死銀杏落葉もなぐさめて 佐藤 鮎美
- 茅草に影のうつろふ秋の空 宮 たかし
- 国分尼寺黙を広げて草紅葉 保坂 末子
- 上総国迷子となりし秋探す 星野 一恵
- 集まつて発句の実りや国分寺 鈴木 瑩子

吟行会総評

天平に思いを馳せ

並木 邑人

平成七年、二十六年に続いて三回目の国分寺・国分尼寺吟行。忙しない日常から勇躍ジャンプして、暫し天平の世に心遊ばせる貴重な時間となりました。提出された四十八句から平安の世経誦す尼に和す素風の句を特撰にいただきました。栗原正子さんでした。今は尼僧は居りませんが、人間が急速に毀れていくこの時代ほど、平安を希求すべき時はないように思いました。

諸家近詠

三浦 侃

萍や地球は笑窪溢れおり
かわほりや人を怖がる吸血鬼
蜘蛛の囿や降り立つ駅は過疎の町
鰻焼く煙は呪文石となる

富澤さち子

一滴を効かせ新茶の薄みどり
青春の歌手は卒寿に大夕焼
故にクレソンせせらぎを独り占め
薫風のベダルの重き誕生日

戸邊 光一

子供の日何処にも子供の影見えず
護身術得しか跳び出す蛸蚪一匹
竹皮を脱ぐ滑らかに鳴くピアノ
田に神を呼ぶため春の水を張る

吉岡 一三

赤とんぼドローン爆撃など知らず
日暮よ排泄順調ならばよし
秋茄子ずつと戦後のまゝでよい
森にジェルソミーナのごとき毒茸

森井美恵子

髪長きを一つに箸置きは椿
八重といふ風の重たき酔芙蓉
海底幾年ブラゴミの大花野
偕老の日々の囿炉裡を開きけり

宮下 奈緒

田の神の息ぎつしりと今年米
忘るるほど旧姓遠し秋海棠
手長猿揺らして移る秋の雲
殺気なき菊人形の二本差

吉田 耕史

小春日や卒寿をめざし歩きたず
海底の戦艦叫ぶ赤のまま
病むときは屈んで耐えよ冬すみれ
焼け跡の土蔵は高し空襲忌

元橋 孝之

たまさかの縁深まる桃の花
何処からか飛んで手の中夕螢
花石榴晩学と言ふ道の果て
天折や青柿ぼとり無為の業

宮本美津江

うららかです猫吸ひに来ませんか
完璧な夏には薔薇がまだ不足
だしぬけに月が綺麗と言はれても
不器用だけどほほづきは鳴らせませす

山崎 幸子

ひとり飯食う記憶八月十五日
銀河には顔覚えなき父の居る
とんとんと今の過ぎをり草の花
七月の空の隙借りシート乾す

山口 彩子

能登瓦黒きが哀し雪散れり
暁暗の動く気配を霜の声
楼蘭はいまもまぼろし黄砂降る
人嫌いして人恋し栗の花

八島 岳洋

秋風の筈が朝から風暑し
からすうりの花線状降水帯接近
九十五歳誕生日前代未聞
地震津波大雨洪水嘆異抄

《会員・会友の近況》

・青春の歌手とは菅原洋一さん、卒寿です。
二十代の頃に何度か、タンゴバンドと共演
のコンサートに行っていました。懐かしい
です。
(富澤さち子)

・孫を長く預かり、家庭菜園をやりに「半農
半孫」と自嘲していた。孫も中学生になり
自由時間が増して、俳句と将棋と菜園にが
んばっています。
(吉田 耕史)

・スマホがネットにつながらなくなったので、
メールも送れなくなりました。少し不便で
すが静かです。
(宮本美津江)

・買い物帰りに転びました。女の人は救急車
を呼び、病院まで行ってくれ、男の人は帰
り道が一緒だからと送ってくれ、別な人は
飲み物まで用意してくれて、見知らぬ人の
親切に感動しました。
(山崎 幸子)

・卒寿近くともなりますと、頭の体操にも程
遠いのですが、俳句のいのちを頂いており
ます。
(山口 彩子)

・左足を剪られてから私は常に終活の思いで
過ごしてきました。娘の棲家の千葉県は遠
い存在でしたが、運命でしょうね。いつの
間にか、松戸の施設にお世話になっていま
す。外出も出来ず、やる事もなく俳句しか
ありません。九十四年生きた中での旅の記
憶やら何やら硬化した脳を叩き叩き、頑張っ
ています。十二月で九十五歳になります。
(八島 岳洋)

・月一回の君津研究句会に出席することが私の
目標です。今ある刻を大切に過ごしたい
と思っています。句に結ばれた縁に感謝で
す。
(森 孝子)

安井 三緒

新会員・会友紹介

よく動く奏者の眉やクリスマス
鳩水上に来て滴れり

殻焚くや長生村の藁ほつち
秋出水卒塔婆も混じる浮遊物

森 孝子

人を待つ床一条の滝かかり
熱を吐く天の歯ぎりカンナ燃ゆ

この先の不安をかくす夏帽子
二軒目に探す書のあり涼新た

山中 葛子

村雨来る一喜一憂はやいはやい
振り返らず日暮れは花のいちもんめ

竹落葉はらはらどきどき一人称
老いながら半透明に晩夏逝く

山崎 公子

ピオロープ雨を澄まして秋曇り
嫌いでしょ開口一番春疾風

蓋を取る筈ご飯目の数は
怖かった夏が去ったと実南天

木之下みゆき

秋の蜘蛛文士は糸を吐き続け
今宵名月子規居士が若返る

調律は自由海の日の海が鳴る
驢馬は耳痒し痒しと梅雨兆す

森須 蘭

噂話は気にしない主義紅葉山
陽の匂い溜め込んでいるカンナの黄

肩甲骨から秋風になつてゆく
関節の痛み次々赤とんぼ

夷隅郡御宿町 徳田 悠子(会友)

(推薦者 高橋 宗史)

アメリカンブルーの花ハリスと処熱渡り合う
長雨にふくらむアルト秋の虫

国分尼寺秋雨の剃り跡オフィーリア

四街道市もねの里 天野 清昭(会友)

(推薦者 並木 邑人)

雲の峰カリオアエロアコッパン
加齢という妙薬を得て午睡かな

秋灯や一人芝居の椅子一つ

佐倉市山王 渡辺 遊山(会員)

(推薦者 大石 雄鬼)

秋風に背中を押され旅仕度
初秋や篠笛の音に耳澄ます

爽やかなせせらぎの音に握り飯

四街道市みそら 阿部さくら(会友)

(推薦者 高橋 宗史)

鉄棒の子ら万緑を蹴りあげる
胡瓜もぎ青い地球を丸かじり

蜘蛛の囲の蜘蛛と目の合ふ殺せない

館山市館山 鈴木卯ノ花(会員)

(推薦者 東 國人)

白紫陽花うそつく前の深呼吸
厚底の中は空洞夏休み

烏瓜ことばのあやに引つかかる

・小学生の子どもが「ヤバスギワロタ」とよく言うので、私も負けじと家でよく使っています。
(鈴木卯ノ花)

・先日現代俳句協会 秋尾敏副会長の講演会に参加した。「碧梧桐と虚子」の俳句を時系列で見ながらの比較研究である。特に印象に残ったのは、虚子にホトトギスを担当させ、碧梧桐に新聞「日本」の俳壇選者を引継いだことである。これにより近代俳句の基礎が確立。百年先を見据えた子規の後継者決定。恐るべしである。(三浦 侃)

※吟行会に参加して

・五井駅でバスに乗り、国分寺中央公園に着、先ず国分尼寺跡へ。ここには矩形の回廊が復元されており、更級日記の時代を彷彿とさせます。国分寺跡では月に一度の骨董市が開かれていて、境内いっぱい色んなものが並べられ、骨董市というより自由市という雰囲気でした。秋の一日を存分に楽しませて頂きました。(鹿兒嶋俊之)

《弁柄の回廊の庭秋の蝶 俊之》

《秋麗骨董市に小鳥籠 俊之》

・吟行目的地に強く惹かれ、広い野に復元された国分尼寺跡に立ちました。故郷を捨て尼になる、修業の経文読解・誦経の日々、髪を切る、心の内は如何に……。どうか十七音になりました。拙句と常々自覚しており、吟行も初参加です。皆様の佳句が、現地と照らしてこうなると得心もしました。実り多い吟行へ御尽力いただいた幹事の皆様、落穂を拾ってくださいました会長殿に深く感謝いたします。(栗原 正子)

私の感銘句

大庭 芳郎

伊東屋に4Bを買ふ秋の昼
 独りとは自由不自由吾亦紅
 夕刊をはみ出して来る残暑かな
 青柿や俳句とは捨て台詞なり
 法華経寺の参道に買ふ衣被
 ひらめきは鋭角にくる小鰯刺
 なんとなくだけれど前世は海鼠

窪田 俊作

霜柱二の足を踏む罪悪感
 大根煮るたましいという大荷物
 八月十五日野球を点けてよく眠る
 突堤の風ほしいままアロハシャツ
 塔持たぬ遊牧の民雲素秋
 秋がジグザグファックスの紙つまり
 秋意とは風なりき唇あけて老ゆ

永妻 和子

難聴のふしぎな返事紅葉して
 大吹雪白い恐怖の車中泊
 秋冷のときどき歪む水鏡
 マフラーを結び夜景を取り戻す
 寄りかかる柱のゆるる建国日
 赤い羽根付けて密会永田町
 渾身の芽吹きを見せる登校日

なかもと淑子

伊東屋に4Bを買ふ秋の昼
 綿虫やこの村からも少年兵

作者名 号頁

越野 雄治	148	3
神作 仁子	148	4
徳吉洋二郎	149	8
並木 邑人	150	3
中山 皓雪	150	5
林 ゆみ	151	4
宮本美津江	151	5
小野 功	148	2
塩野谷 仁	148	3
土井 探花	150	3
樋口 博徳	150	4
木之下みゆき	150	4
増田 元子	151	5
山崎 政江	151	5
山中 萬子	151	4
宮下 奈緒	151	4
増田 元子	151	5
山崎 政江	151	5
村上 澄子	151	5
宮原 青佳	151	5
南川 好玄	151	5
越野 雄治	148	3
小野富美子	149	8

ひな祭ナース詰所の薄明かり
 十年日記父の無念に風入れる
 ゆく春の火種のひとつ消しきれず
 防人のうた千年の飛花落花
 よもつひらさか粉殻を焼くけむり

小多田文字

転生の星座を描き山眠る
 天網の破れぐるぐる巻くマフラー
 ごつごつと山動かして木の芽吹く
 青柿や俳句とは捨て台詞なり
 天高し明日歩かため今日歩く
 防人のうた千年の飛花落花
 朝顔の紺いろ潮騒のかすか

倉岡 けい

大根煮るたましいという大荷物
 水馬円周率を抜け出せず
 パスワード変へて氷の声を聴く
 麦秋となつて夕日のむず痒い
 青春の前髪五ミリつめて夏
 炎天のどこを向いても黄な臭い
 上げた手のやりどころなし蠅叩

松本 千花

極月の水を見ていることが旅
 カリフラワーモノクロームな舌さわり
 満月や鳥獣戯面に事件です
 引力に乳房は任せ登高す
 たったひとつの地球にこぼれる花びらだ
 月光の梯子を降ろせ国境
 笑うたび夏に近づく女の子

鈴木 房州 149 9
 長濱 聰子 150 3
 中村 冬美 150 4
 羽村美和子 151 4
 細根 栞 151 4

小野 功 148 2
 川守田美智子 148 3
 長井 寛 149 8
 並木 邑人 150 3
 長濱 聰子 150 3
 羽村美和子 151 4
 早乙女洋子 151 7

塩野谷 仁 148 3
 長井 寛 149 8
 高橋 健文 149 8
 戸邊 光一 149 9
 保坂 末子 150 3
 袴田 菊子 150 4
 星野 一恵 150 4

塩野谷 仁 148 3
 窪田 俊作 149 8
 鈴木まんぼう 149 9
 高木 一恵 149 9
 高桑婦美子 149 9
 羽村美和子 151 4
 松村 五月 151 4

たつたひとつの地球にこぼれる花びらだ 高桑婦美子
 道端にこぼれている花びらに注ぐ温かいまな
 ざし。不安をかかえながら難しい時代を生きて
 いる私達に、たつたひとつの地球を慈しむこと
 の大切さを教えてくれる。

秋谷 菊野

遠足の列に乱れや洋菓子屋 金 蘭 148 4
 何もせぬことへの疲れ遠花火 片岡伊つ美 149 8
 引力に乳房は任せ登高す 高木 一恵 149 9
 大蜘蛛と暮らす晩年まあいいか 袴田 菊子 150 4
 呼び戻すには秩父音頭の花明り 野口 京子 150 4
 塔持たぬ遊牧の民雲素秋 木之下みゆき 150 4
 月見草死にたくなって死の話 馬淵 津枝 151 4
 大蜘蛛と暮らす晩年まあいいか 袴田 菊子

林 ゆみ

なまはげのひとり金髪あそび菓 久野 康子 148 2
 大根煮るたましいという大荷物 塩野谷 仁 148 3
 山椒魚ほどに濡れいて涙石 清水 伶 148 5
 水仙の系図いちばん上は海 直江 裕子 149 10
 がらんどうの音高らかに武具飾る 浪岡 玄 150 5
 竹林の風はテノール夜夜の月 三浦 侃 151 5
 成田発成層圏行きおにやんま 吉岡 一三 151 6
 岡田芙美子
 ロコモとは無縁なシューズ天高し 興津 恭子 148 4

物言いの鋭角になる寒い夜
このとり一本脚の秋の夢
房総の背をうねらせる青嵐
健やかな脳で新涼の扉を叩く
手のひらの力を抜いてひなあられ
露寒や声なき声の無言館

川上 典子 149 8
岡田 春人 149 10
福田志津子 150 3
木之下みゆき 150 4
松澤 伸佳 151 4
山中 頼子 151 5

佐藤 鮎美

銀木屋夢に來し人みな若し
むすんでひらいて手の平に冬銀河
影さして蝶がひとりじゃないという
間違ひなく我が子の軟凍てる街
上げた手のやりどころなし蠅叩
夏帽子犬を「この子」と抱き上げし
酔い醒めて枯野の月を置いて去る
間違ひなく我が子の軟凍てる街

黒澤 雅代 148 2
窪田 俊作 149 8
直江 裕子 149 9
藤好 良 150 4
星野 一恵 150 4
安井 三緒 151 4
山田たかし 151 7
藤好 良 151 7

島 隆史

ウオッカの壘の形に冬来る
流木の精霊ならん鷹柱
寒風を来て図書館はカンガル
血の巡り悪き頭や雪が降る
あんだよ出ている緑陰の乳母車
プーチンへエーデルワイスの涙哉
手のひらの力を抜いてひなあられ
あんだよ出ている緑陰の乳母車

越野 雄治 148 3
椎名 鳳人 148 3
島田 翠松 148 4
高橋 健文 149 8
藤田 富江 150 4
木之下みゆき 150 4
松澤 伸佳 151 4
藤田 富江 151 4

季節は五月頃の緑豊かな頃。乳母車から出て
いる小さな足。小きぎみに、活発に動いている。
小さな子の動きは、あどけなくかわい。その
様が生き生き描かれていて、ほっとする気持ち
になりました。

石井紀美子

綿虫のあればわたしの旅心
水馬円周率を抜け出せず
一本の樫オリオンはまだ遠い
さくらんぼ揺れているのは地球です
ガサツと落葉わたしが落ちて
夕焼と私のあいだ眼鏡置く
のひらに夜が来ている金魚の死

大見 充子 148 3
長井 寛 149 8
高橋 健文 149 8
徳吉洋二郎 149 8
羽村美和子 151 4
松村 五月 151 4
山崎 政江 151 5

尾形ゆきお

極月の水を見ていることが旅
夕ぐらし魂函いくつ開け放ち
太陽の消印ひとつ黒揚羽
夕刊をはみ出して来る残暑かな
雨のち黄砂そして総理を撃つ男
拾ふなよその手袋につかまれる
ひまわり迷路絶望的に晴れている

塩野谷 仁 148 3
清水 伶 148 3
清水 伶 148 3
徳吉洋二郎 149 8
武田 伸一 149 9
浪岡 玄 150 4
羽村美和子 151 4

近藤 幸子

月光の投網のかかる枯はちす
冬晴れや切絵を抜ける馬の群
何もせぬことへの疲れ遠火花
寒波来る遠近法でやってくる
竹皮を脱ぐ幼へ言葉ほぐしつ
沈む太陽夏空を使ひきり
裂け石榴人に自白の慣いあり

坂間 恒子 148 2
川守田美智子 148 3
片岡伊つ美 149 8
徳吉洋二郎 149 8
中村 博子 150 3
中里 結 150 4
実籾 繁 151 4

冬晴れや切絵を抜ける馬の群 川守田美智子
作者の感動が即伝わってきました。冬晴れの
透き通った空気の中、風景は切り絵のようにつ
きりと在り、日に当って躍動する馬の群れは力
強い。静と動を巧みに表現されました。

袴田 菊子

大根煮るたましいという大荷物
花冷や終着駅の古時計
八月の空の重さを昭和という
青柿や俳句とは捨て台詞なり
拾ふなよその手袋につかまれる
ふたりです空想老人の晩夏
零余子飯歳月水の如く過ぎ

塩野谷 仁 148 3
高橋 節夫 149 8
徳吉洋二郎 149 8
並木 邑人 150 3
浪岡 玄 150 4
山中 葛子 151 4
森 孝子 151 5

河合 利枝

魚曳く益荒男九十九里ヶ浜
寒晴の雑踏もまた成田山
ガレットに包むはこべらせりなずな
秋麗や返却前の本を閉じ
抱きしめてやりたき主張吾亦紅
菜の花の海に明日をとり戻す
恋の猫丸くなったり尖ったり

久保 筑峯 148 5
加賀谷秀男 148 5
川上 典子 149 8
佐藤 直子 149 8
川島 里子 149 8
川上 典子 149 10
野口 京子 150 4

森須 蘭

洋梨のゆがみはきつと重力波
鱧缶のパカッとバレンタインの日
白菜をひらけば昼の渚なり
太陽の消印ひとつ黒揚羽
もの忘れするたび春の近づくか
雨のち黄砂そして総理を撃つ男
春愁の張りついている左肩

森井美恵子 147 4
東 國人 147 6
久野 康子 148 2
清水 伶 148 3
高橋 健文 149 8
武田 伸一 149 9
中村 冬美 150 4

白菜をひらけば屋の渚なり 久野 康子

鍋の季節である。長葱・白滝・春菊・豆腐。そして主役のような顔をしている白菜。多分、作者は一人で台所に立っているのだと思う。買ったきたばかりの白菜をバリツと割る。割られた白菜の断面の瑞々しさと静謐さが「屋の渚」であるという。誰も居ない静かな台所の空気が、白菜の渚に包まれているような錯覚さえおぼえる。洗練された表現に、読む側がハツとさせられた一句。

富澤さち子

さくさくと幸先詣ゆめうつつ 遠藤 寛子 148 2
はるかとは父いる午後の漆の実 清水 伶 148 3
日めくりを剥く立春の気を流し 杉山真佐子 149 9
菜の花の海に明日をとり戻す 川上 典子 149 10
関宿の差配江戸へと春の川 田村 隆雄 149 10
呼び戻すには秩父音頭の花明り 野口 京子 150 4
大河春色白鷺一羽慰わせて 藤田 富江 150 5

東 國人

生かされてみな右を向き葱坊主 小川トシ子 148 4
何もせぬことへの疲れ遠花火 片岡伊つ美 149 8
猫の恋上目遣いの顔の傷 鈴木 房州 149 9
沈む太陽夏空を使ひきり 中里 結 150 4
木通ぶらり蜻蛉ふうわり 谷津の息 政成 一行 151 5
廃線や青野の先は過去ばかり 菊地 喜己 151 7
秋深しハシビロコウ化してる夫 豊崎まゆみ 151 7
生かされてみな右を向き葱坊主 小川トシ子 151 7
たぶん、目の前にある葱の畑の光景かと思わ
れるが、深読みすると現在の日本の世相を捉え

た句とも言える。我々は為政者に、死なない程度に生かされて右向け右をさせられている。世の右傾化を暗示している句。

徳吉洋二郎

ここでは敗者頼朝雪中花 遠藤 寛子 148 5
古代蓮骨透けるまで見つめおり 下村 洋子 149 10
髭撫で祭りダリにも負けぬ髭漢 鈴木まんぼう 149 10
離陸機へ案山子背伸ばす三里塚 中村 博子 150 5
房総の海が好きです枇杷の花 星野 一恵 150 5
蜜豆とエンディングノートがやって来る 早乙女洋子 151 7
机のポラロイド音なき冬の雨 山田たかし 151 7

安井 三緒

氷点の水に漲る力かな 椎名 鳳人 148 3
海に向く一枚硝子いわし雲 里見 さち 148 5
遠富士も筑波も見えて冴返る 興津 恭子 148 5
夕刊をはみ出して来る残暑かな 徳吉洋二郎 149 8
風紋や秋は小走り九十九里 福田志津子 150 3
月見草死にたくなくて死の話 馬淵 津枝 151 4
保線工の叩く鉄音冬オリオン 山田たかし 151 7

菅ノ谷文字

大根煮るたましいという大荷物 塩野谷 仁 148 3
脱皮後の少女はさくら吹雪かな 小林 実 148 3
箒目のほがらか寺や酔芙蓉 金 蘭 148 4
訳もなく泣ける嬉しさ星月夜 下村 洋子 149 8
寒波来る遠近法でやってくる 徳吉洋二郎 149 8
恋の猫丸くなったり尖ったり 野口 京子 150 4
ながれてまた風になる赤とんぼ 山田 邦彦 151 5

田村 隆雄

太陽の消印ひとつ黒揚羽 清水 伶 148 3
物言いの鋭角になる寒い夜 川上 典子 149 8
水馬円周率を抜け出せず 長井 寛 149 8
夕刊をはみ出して来る残暑かな 徳吉洋二郎 149 8
蠟梅のたましい抜けてゆく香り 岡田 春人 149 9
書き出しの泥濘にいる青鯨忌 並木 邑人 150 3
梅雨に入る医院のドアにタッチして 保坂 末子 150 3

藤田 富江

落葉時雨知らぬふりしてすれ違い 北野 耕太 148 4
処方薬なし風船に若い息 興津 恭子 148 4
ガレットに包むはこべらせりなずな 川上 典子 149 8
みちくさのあとはスキップ花胡瓜 富澤さち子 149 9
呼び戻すには秩父音頭の花明り 野口 京子 150 4
ひらめきは鋭角にくる小鱈刺 林 ゆみ 151 4
手のひらの力を抜いてひなあられ 松澤 伸佳 151 4

木之下みゆき

青水柱わがうすずみの肺ふたつ 下村 洋子 149 8
弥生への発語と思う森の私語 田村 隆雄 149 9
柿若葉雨に洗うという力 藤田 富江 150 4
夕焼と私のあいだ眼鏡置く 松村 五月 151 4
晩年の受け身あらつと桃吹くや 山中 葛子 151 4
父の日の醬油をはじく目玉焼き 村田 珠子 151 5
まだ星になる気もなくて星祭 宮本美津江 151 5
晩年の受け身あらつと桃吹くや 山中 葛子 151 5
桃が吹かれたのではありません。棉の蒴果が
裂けたのです。晩年のゆつたりとした時間と季語
の幹旋がお見事で、「あらつ」と呟いては、自分を
確認し自分を取り戻す日常。大いに共感しました。

強化部だより

第七回あしたば句会(九月開催)

地虫鳴く誰かに必要とされたい 青野 友香
 俳論はおほかた理屈秋刀魚焼く 石井 稔
 虫しぐれもはや右脳となつてゐる 羽村美和子
 夫バン派私こはん派小鳥来る 鈴木卯ノ花
 きりきりと酷暑巻きあくコースター 遠藤 寛子
 流れ星石の鏝は手の中に 三宅たくみ
 よく道を聞かれ団栗番となる 松本 千花
 水澄むや龍の化石を探さうか 無 子
 しくしくと葉を食む音や星月夜 森井美恵子
 四姉妹笑うたび聴く虫の声 佐藤 鮎美
 インスタの小さな秋に押し「いいね」 東 國人
 稲穂波風から龍が飛び立つて 陸野 良美
 石切り三段散る白百日紅 白木 暢子

夏雲システムを使用し、兼題「虫」「石」
 で行われました。十一月は吟行になりますの
 で次回の句会は来年一月になります。
 参加希望の方はご連絡ください。

kokomiya2003@yahoo.co.jp

(青年部・三宅)

第三回高校生俳句大会募集について

令和七年度・第三回の大会は、応募締切が
 夏休み直後になる予定です。募集に先駆けて、
 過去の入賞作品を紹介いたします。
高校生の部作品集(第一回、第二回)
 ● 第一回(令和五年度)
 1 届くかなりモート祈願初詣 昇輝

2 大そうじこんなところに思い出が 花梨

秋空や遠く響いた応援歌 茉理
 練習中楽器に映つた青い空 茅夏
 冬霧やぼつんと灯る勉強机 彩空
 紅葉の写真に染まる電子機器 莉那

● 第二回(令和六年度)

1 青りんご果実の知識熟れなくて 光希
 2 凧や持久走後の木乃伊たち 晶

先輩の青春残る椅子机 獅扇
 受験票不安もリユックにつめ込んで 未夢
 牽制死あつという間に終わる夏 友斗
 扇風機君は僕より人気もの 琉輝亜

1 が千葉県現代俳句協会会長賞
 2 が俳句大会委員長賞に輝いた作品です。
 次回も大人が驚く斬新な俳句を期待しています。
 (高橋宗史記)

初心者講座 第二期

第六回く七回

ダリア大輪サロメは斬りて首かかぐ 栗原 正子
 ライオンの群れ離固定年の秋 荻野由美子
 戦死者に親あり子あり冬銀河 横須賀弘子
 開きゆく硝子のハート冬薔薇 宮原 青佳
 年重ね頑固となりぬ種瓢 山崎 幸子

第六回目から後期が始まりました。異常
 な猛暑で体調を崩された方があり、メンパー
 を欠いての出発になりました。毎回いろい
 ろな俳句形式や、修辞法の課題をこなしな
 がら頑張っています。先日の秋の吟行会に
 は、初参加で優秀な成績を修めた方もあり、

皆で喜び合い自信を深めているところでは
 途中からの参加も大歓迎です。一緒に
 楽しみましょう!
 (羽村美和子記)

定期総会及び

創立四十五周年記念俳句大会のご案内

会報一五二号でお知らせのとおり、来
 年度より総会と俳句大会を分離して開催
 することになりました。来年は創立四十
 五周年を迎えますので、秋の俳句大会を
 記念俳句大会とします。

左記のとおり日程が決まりました。多
 くの皆さまに是非ご出席頂きたく、ご案内
 致します。

*令和七年度定期総会・席題俳句大会

日時・令和七年三月十六日(日)

十一時三十分〜十六時三十分

受付・席題発表・十一時三十分

会場・千葉市民会館

*創立四十五周年記念俳句大会・祝賀会

日時・令和七年十月十二日(日)

大会・十三時〜十六時三十分

祝賀会・十七時〜

記念講演・池田澄子氏

会場・千葉市文化センター

*総会・席題俳句大会のお知らせ、及び
 創立四十五周年記念俳句大会の作品募
 集チラシは、後日お送りします。

□□津田沼研究句会報告

(於…津田沼一丁目町会会館)

●第三八四回(令和六年九月十日)

司会 白木 暢子

秋冷やしかばねは無二の親友 池田 博臣
 赤錆のレールと黄花コスモスと 大喜 京香
 敬老の日できないものはできないの 伊与田すみ
 川鶴鳴いて打倒DJヤース談合す 並木 邑人
 「業」は厄介うからやからや午莠引く 鈴木 瑩子
 発情のライオン晒す月光の檻 栗原 正子
 母と子の荒川土手や草紅葉 小林 実
 一刹那重ね命終つづれさせ 高木 一恵
 天の川別れた夫にまた出会う 徳吉洋二郎
 夢二忌や私ではなくいる私 増田 豊子
 熟睡の脳のスイッチ雁渡る 白木 暢子
 かんかんと金属音する残暑 長井 寛
 リハビリへ先導高く赤とんぼ 股野 久子
 隠り世に席を移せり白木権 星野 一恵
 ひそやかにドコでもドアー秋の風 なかもと淑子
 空襲の空よみがえる遠火花 村上 澄子

□□青葉研究句会報告

(於…千葉市民会館)

●第一五八回(令和六年十月二十四日)

司会 並木 邑人

走るように歩き列島晩秋 徳吉洋二郎
 隣人をこよなく愛す秋の蝶 長井 寛
 人の世は例えれば迷走台風圏 長濱 聰子
 飛び切りの一茶の里の走り蕎麦 鈴木まんぼう
 走り書きのようない一言男郎花 池田 博臣

鎖場にはつたらかされ曼珠沙華
 散紅葉走井よりの新世界
 ノーベル平和賞国境の霧襖
 馬走る秋の地平に夕日蹴り
 爽やかに生き急ぎたり走り馬
 拷問のごと桜剪る人の闇
 走り蕎麦昭和は遠しあつと過ぐ

並木 邑人
 栗原 正子
 森井美恵子
 石井紀美子
 越野 雄治
 加賀谷秀男
 山崎 幸子

□□柏研究句会報告

(於…柏市「ハックルベリー書店」2階)

●第一四三回(令和六年十月十二日)

司会 長井 寛

不意の月たちまち消えて都会の夜 高橋 宗史
 心髄に悪魔の笑い大南瓜 長井 寛
 新札のへばりひつつく残暑かな 藤好 良
 墓を売るチラシの上で爪を切る 松澤 龍一
 敗戦日生命線の深き溝 佐藤 鈴子
 この村に別の貌あり秋祭 椎名 鳳人
 秋の野や草書のやうに生きし母 岡田 春人
 秋うらら眼鏡掛けたまま熟睡 小野 功
 拝み太郎にびくり越後屋の獅子 木之下みゆき

□□君津研究句会報告

(於…君津市生涯学習交流センター)

●第五十六回(令和六年十一月七日)

司会 長井 寛

敵は助詞苦戦している秋の夜 大地 節子
 出来る事数え秋思を稀釈する 長濱 聰子
 頭字語のこんがらがって日短 田沼美智子
 秋の蚊の逃げ込む先の世界地図 越野 雄治

小鳥来る身の十字架を整えに
 頷いた数だけ忘る毛糸帽
 鳥兜身におぼえなき噂聞く
 現世は迷路ばかりぞ穴まどい
 踊ろうよポブラ並木の月光で
 お下りのセーター前身頃の染み
 身の丈に似合う生き芳草の花
 荒れ畑確かむるかに秋の蝶
 黄コスモスわたし只今メイク中
 豆柿の猥談下校生に止む
 容赦なく身に纏い付く隙間風
 秋の空アーモアヒロシマ、ノーモアナガサキ
 現生の所詮は蛸蛸無縁坂
 サウナ室シルバーサロン冬隣
 枯山水色なき風と擦れ違ふ

石井紀美子
 加藤 法子
 泉 志眞子
 前田 孝子
 山田たかし
 小澤 富子
 森 孝子
 村田 満枝
 徳吉洋二郎
 並木 邑人
 羽矢 眞人
 佐藤 鮎美
 長井 寛
 古賀 壽昭
 北野 耕兵

□□いすみ安房研究句会報告

(於…勝浦駅前「ふじや」)

●第四回(令和六年九月二十二日)

司会 高橋宗史・東 國人

卒塔婆を手に特快に乗る男 坂間 恒子
 難問の方程式や台風圏 柴田 洋郎
 虚礼はびこり荒草に拮抗す 並木 邑人
 アスファルト浮かす根つこの力瘤 政成 一行
 林檎剥く皮一筋に残る自我 鈴木卯ノ花
 天界の句会の数や葎の花 吉田 耕史
 真葛原夜には石も寝返るか 羽村美和子
 唇に沸き立つ海を潮湿り 徳田 悠子
 秋の蚊に知らないうちに献血す 東 國人
 野葡萄の完了形は青きまま 高橋 宗史
 歌詠みの定住漂泊風仙花 長井 寛

ひろば

野田俳句連盟主催

第二六〇回俳句大会(秋季)入賞者

令和六年九月二十九日(日)、興風会館小講堂に於いて第一六〇回大会を開催した。本大会においてはすべて事前投句とし席題なしの改革を行った。出席者五十二名、欠席者五十八名、計一〇名と盛況な大会となった。

(高橋宗史記)

【入賞者作品】二句合点 代表作

市長賞

不器用に生きて花野におく余生 山中とみ子

議長賞

人形が揺れて菊師の口に紐 飯塚 宣子

教育長賞

月の夜や山椒魚が岩になる 岡田 春人

連盟賞

夕映えをとごだめてゐる烏瓜 紬 真知

第五位

産土は黄泉より遠し木の実降る 徳吉洋二郎

第六位

露けしや結界といふ石一つ 吉田 叔子

第七位

忘却などあるはずは無し原爆日 安部 潤

第八位

広い空余生は風のねこじやらし 川上 典子

第九位

新涼や末尾に崩し字の「かしこ」 早坂 哲夫

第十位

時間こそ無二の妙薬秋彼岸

山崎 純子

■市原市文化祭俳句大会

十一月二日、高橋宗史副会長を主選者に招き、文化祭俳句大会を開催した。大会には県内外から四一四句、小中高生徒による第十五回文芸コンクールでは市内十校から六二〇句の応募があり、当日の席題句会は荒天の予報にも関わらず二十三名が出席した。また表彰式は藤谷教育長臨席のもと、多数の小中高生が参列して実施した。(並木邑人記)

☆一句目事前投句、二句目席題／初時雨・林檎

市長賞

白桃むくやの衣を解くやうに 大内田芳乃

改札で送る背小さき初時雨 円谷 圭子

俳句協会賞

いわし雲路地でつながらる漁師町 戸谷 洋子

初時雨炊ぎの匂ひ残る路地 鈴木 喬二

議長賞

絵手紙をはみ出して来る残暑かな 徳吉洋二郎

林檎剥く左右の椅子の空いて居り 加藤 法子

教育長賞

睡蓮の水の余白や塔の影 佐藤 信子

初時雨仏と白湯を分けおうて 魚井満里子

文化祭実行委員長賞

天領の空へ斬り込む帰燕かな 丸喜 久枝

初時雨この一病に十余年 小出美千代

☆文芸コンクール／俳句の部

市原市長賞 千種小一年

あさがおとおんなじおおきわたしたので 中嶋 陽菜

凛として友と弓引く盛夏かな 齋賀 琉奈

俳句協会賞 清水谷小三年

青い空わたしとひまわりせのびする 東條 真帆

宿題を飛ばしてほしい扇風機 土屋 菜那

議長賞 千種小二年

ゆかたすがたきよのわたしはおねえさん 森田 陽莉

夏風が袴の裾を吹き抜ける 木戸 優太

教育長賞 白幡小六年

夏空に打球伸びゆく逆転打! 高山 侑

父さんの背丈を越した夏の夕 安念 歩夢

文化祭実行委員長賞 千種小四年

炎天下決めるぞぼくが決勝点 岡本 蒼太

蝉時雨自転車漕いで向かう塾 西塚 夏芽

※現代俳句協会令和六年度
会費納入はもう、お済みでしょうか?

会費の一部は、千葉県現代俳句協会の活動費の原資となっています。未だの方は、年内にお納め願います。払い込み用紙を紛失された方は、左記へご連絡ご請求ください。会員の方 本部事務局へ

03-3839-8190

図書紹介

■句集『顔の原型』 石井 稔

令和六年九月十五日刊 俳句アトラス刊
鳥雲に人間はみな棒である
微笑みが顔の原型草の花
白梅のきつぱりプラトニッククラブなり

■四十五周年記念基金の募集

千葉県現代俳句協会の四十五周年記念事業を円滑に実施するため、基金を抛出していただきたく、お願い申し上げます。

- 一期 間 令和六年十一月〜七年十月十日
- 二目標金額 七十万円
- 三一口の金額 二千元（何口でも可）
- 四 払込先 千葉銀行 稲毛東口支店
普通預金 3889475
口座名 千葉県現代俳句協会
会計 松本千花

ご寄付頂いた方のお名前は『現代俳句千葉』に掲載させて頂きます。なお、吟行会や句会等で役員・幹事に直接お渡し頂いても結構です。

諸物価高騰の折、誠に恐縮ですが宜しくお願ひ申し上げます。千葉県現代俳句協会も経費の削減に努力しつつ運営して参ります。

（基金募集委員会委員長 高橋宗史）

四十五周年記念基金参加御礼（一次）

- （五口） 山口彩子
 - （十口） 東 國人
 - （二十口） 高橋宗史
 - （二十五口） 並木邑人
- （一口二千元・敬称略）

掲示板

△会員・会友異動▽

●退会（会員） 武田和郎 市川ふみを
（会友） 原 悦子

●新会員・新会友

中村 兼子（会員） 大石雄鬼 紹介
本吉万千子（会友） 羽村美和子 紹介

●住所変更

佐久間眞城（会員） 地区内移転
正山オグサ（会員） 東京から
松本 悦子（会員） 地区内移転

△令和六年度第四回幹事会△

- 日時 令和六年十一月十九日（火）午後一時〜
- 場所 船橋市勤労市民センター
- 議題
- 一 令和七年度俳句大会について
- 二 四十五周年記念俳句大会について
- 三 令和六年度秋の吟行会について
- 四 結果・会計報告など
- 五 青年部活動報告
- 六 初心者向け講座について
- 七 一般社団法人現代俳句協会（本部）の動向について

- 七 各地区協会俳句大会について
- 八 会報一五五号について
- 九 各研究会の状況について
- 十 その他

- ① 研究研修費について
- ② 会員・会友動静（事務局長）
- ③ 会計監査打合せ 令和七年一月十四日（火）（予定）
- ④ 次回幹事会 令和七年一月二十一日（火）（予定）
- 総会議案書決定
- ⑤ その他

□□事務局・編集部だより□□

●元日の能登地震、酷暑、物価高騰、パリ五輪、ノーベル平和賞、止まない戦争報道。今年も様々ありました。来年は千葉現俳四十五周年です。皆さんで大いに盛り立てていきましょう。七年度用の「私の感銘句」同封しました。奮ってご参加ください。

<p>現代俳句千葉 第一五五号 令和六年十二月一日発行</p>	<p>発行人 千葉県現代俳句協会 会長 並木 邑人</p> <p>現代俳句千葉編集部 〒278-0037 野田市野田 六七七-11A二二五 木之下みゆき</p> <p>千葉県現代俳句協会事務局 〒277-0084 柏市新柏二-13-16 岡田 春人</p> <p>TEL・FAX 〇四一七一六一―一六三九</p>
-------------------------------------	--